

1701(元禄14)年3月14日、赤穂藩主浅野長矩(内匠頭)が江戸城内で刃傷事件を起こし、激怒した5代將軍徳川綱吉の命により、その日のうちに切腹させられた。相手の吉良義央(上野介)は軽傷で済んだが、武家の慣習から言えばケンカ両成敗で、何らかの処分は免れないはずである。ところが吉良は「殿中で刀を抜かなかったのは神妙の振る舞い」とされ、何の咎めもなかった。

これを不服とする浅野の遺臣47名が本所松坂町(現在の墨田区両国3丁目辺り)の吉良邸に討ち入ったのが、1年9か月後の1702(元禄15)年12月14日。刃傷事件後、吉良義央は養子の義周に家督を譲って隠居し、実子の上杉綱憲(米沢藩主)の屋敷などに住んでいた。普段なら本所屋敷にはいないはずだが、前日にたまたま茶会があり、赤穂義士はそこを襲ったのだ。

その後の幕府裁定で襲撃参加者は切腹の処分を受け、1703(元禄16)年2月4日に刑を執行された。約2年間にわたる一連の騒動が元禄赤穂事件である。この事件については未だ分からない点もあり、そうした不確定要素が小説・映画・ドラマの格好の題材となる。しかし、津軽家が吉良家や浅野家と密接なつながりを持っていたことは、なかなか表に出てこない。

弘前藩4代藩主津軽信政は、江戸で旗本勤めをして



本所松坂町跡碑=2014(平成26)年2月11日・筆者撮影

いたおじの津軽信英の勧めで、高名の兵学者山鹿素行に入門した。素行が初めて津軽家の藩邸を訪ねたのは1660(万治3)年10月である(『山鹿素行先生日記』)。その後、素行を津軽家に召し抱える話が出たが、1666(寛文6)年、素行が罪を得て赤穂藩にお預けとなったため沙汰止みとなった。

しかし、1675(延宝

### 忠臣蔵と津軽家 〜元禄赤穂事件の周辺〜

本田 伸

青森県立  
青森商業高等学校教諭

安芸国三次藩を辞した後、高名は津軽家に入り、喜多村とともに家老に進んで津軽政実(将監)の名を賜った。余談だが、1681(延宝9)年には素行の著作『中朝事実』が弘前藩から刊行されている。

1693(元禄6)

年に江戸定府の藩士として津軽家に召し抱えられた大石良麿(郷右衛門)は、討ち入りの首謀者大石良雄(内蔵助)の従兄弟である。これも、浅野家自体が素行門下で、学問上のつながりからできた縁である。

3)年に素行が赦免されると、信政はその一族や門人を積極的に登用し、自らの側近とした。いわゆる「素行派」である。例えば、素行の次女鶴を妻とした喜多村宗則は1680(延宝8)年正月に家老となり、翌年には信政から津軽姓と「政」の一字を賜って、津軽政弘(監物)と称した。また、素行の長女亀を娶った山鹿興信(高恒)も、

この時期の素行学の影響力は並ではなかった。とは言え、討ち入りのドラマによく出てくる大石良雄の「山鹿流の陣太鼓」「一打ち、二打ち、三流れ」の名場面は、戯曲『仮名手本忠臣蔵』に出てくるだけの話で完全な創作だから、注意を要する。

吉良義央の次女阿久利(あぐり)は、津軽信英が興した黒石津軽家の第3代当主津軽政兎(日本最古の



吉良邸跡=2014(平成26)年2月11日・筆者撮影

東京と青森 636号  
東北青森人会 2021年4月